

或は川の水の無くなることをヒアガルと稱する語と無關係ではなかつたらうかと思ふ。ヒアガルのアガルは蠶のアガルのそれと同義語で、「上」るではなく、「退く」の義で臆測するならば、ヒギルの語根と、アガルとの合成語であつたと考へ得るのである。更に又糸を手繰るならば商賣の不況に陥つたり、失職したりして困つたりするとか「仕事んアガ」たりなつたといふのも「上る」では解釋が難かしいと思ふ。即ち此の場合も「退く」義から稍、

## 蠶 蛹 の 琉 球 語

柳田先生の「音訛事象の考察」中に、蠶サナギ蛹マユの方言西何ニシドク方・ニシャトッコ・ニシムケヒガシムケ等は、殆ど全国的に流布してゐて、元はこの遲鈍な動物に向つて、京の方角を尋ねた子供遊びの名残だと考へられる、といふことが見えてゐるが、之に相當する琉球語のトージャーマーにも

轉じて「無くなる」義であると解した方が適切であつた。されば、右の様な場合、大變困ると、「口ば棚さんアゲとかに、んばい」といふのは、アゲルを「上げる」と誤解した後の世の地口ではなかつたらうか。

以上は只思ひついたまゝを書き留めたのであるが、伊波氏の熱心なる勞作に對して一證となり得たならば幸甚であつた。

## 伊 波 普 猷

やはり子供遊びが關係してゐて、しかも其時に唱へる童謡さへ遺つてゐる。

今はもう廢れて了つたが、私の子供の時分には、夏の初め頃だつたが、土中で化して出て來た、小さい褐色の蛹をとつつかまへて、よくさういふ遊びをしたものだ。

指で摘まむと逃げようとして、腰以上を左右に揺かすので私達はそれにつれて、

トーヤマーガ？ トーヤーマー！

ヤマトーマーガ？ ヤママーヤー！

と諺つたが、これは、唐は何方だ、トーマー、日本は何方だ、ヤママーヤー、といふ意味で、上の句を諺ひ終ると、急に支那の方角に向き、下の句を諺ひ終ると、急に日本の方角に向く、といった調子で、この小さい動物が、如何にもこちらの問ひに應じて、答へてくれるやうに見えたところを興がつたのである。因にいふが、兩屬政策の國で生立つた子供の遊戯や童謡にはかうして兩大國を對照して出したのが多かつた。

それは兎に角、このトーマーガ（唐は何方）は、いつしかトーマーに轉訛して、遂にこの蛹の名になつた。だが、ヤママーヤーは、上の句を承けてヤマトーマーガといつた爲に、頭韻法によつて、引出された意味の無い音群で、トーマー（蛹）の同義語でも何でもなし。トーマーがこの蟲の名であつたかどうかは、う

ろ覺えであるが、さうであつたやうな氣もする。多分この蟲は本草啓蒙に所謂蟻ヂムシ・ネキリムシで、トーマーはこの蟲の名から一般蛹の通稱となり、遂に蠶蛹にのみ縮用されるに至つたのであらう。

思ふに、この造語法と西何方のそれとは、決して偶然の一致では無く、前者は後者の變形したもので、琉球は明初支那の冊封を受けて、爾來支那を愛慕するやうになつたから、西に代へるに唐を以てしたに違ひない。

この一篇が、もし柳田先生の御參考にもなつたら、勿怪の幸である。